西照

西照寺寺報「さいしょう」
第19号
2007年11月1日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
hp　nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

十一月十五日（木）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
十六日（金）午前九時（晨朝）～
午前九時半（満日中）～

布教使　青木哲静師（射水市朴木　覚円寺住職）

西谷山　西照寺

お経について

スートラ

お経とは、お釈迦さまのお説きになった教えを文字にしたためたものです。サンスクリットの原語では、スートラ（sūtra）といい、「糸やひも」という意味があるようです。

お釈迦さまは、多くの教えを説かれましたが、直接文字に書かれるということはありませんで、教えはお弟子たちなどによって口伝えに広まっていきました。お釈迦さまが、ご存命中はそれでもよかったのですが、お亡くなり涅槃に帰られた時に、これは大変だということになりました。人の記憶にたよる口伝では、教えが歪んだり、ぼやけていく危険があるからです。

そこで、「結集」というお弟子たちの集会を何回も開いて、教えを確認する作業がなされました。そして、これはお釈迦さまの説かれた教えに間違いないとお弟子たちが確認したものを、その当時でしたら、木の葉っぱみたいなようなものになのでしょうか、文字を書き記した。ある程度、重ね合わせて束になると「ひも」で綴じてひとつの塊にして保存しました。

のちに、この経典の書かれていたものを束ね綴じていた「ひも」（スートラ）をもって、お釈迦さまの教え全体を象徴的に表現するようになったのではないかと思われます。つまり、お釈迦さまの教えとは何か、それはスートラだということです。

三蔵法師

下って西暦三～四世紀ごろからでしょうか。中国では、多くの三蔵法師と云われる方々が、インドを訪れ経典を持ち帰り、国家事業として翻訳作業に取り掛かります。大抵の方は、西域のシルクロード（絹の道）を通ってインドに行かれていますが、シルクロードは別名「骨道」とも言われています。道なき厳しい砂漠地帯を進んでいくわけですから、道に迷い、途中で倒れていく人もいる。砂漠の中に骨を残していくわけです。後から来た人は、その骨を目印にして、それを乗り越えて新たな道を開いていくということで、道を築いていく。それで骨道と言われているんだそうです。

初期の方に法顕という三蔵法師がおられますが、この方は、十六年の歳月をかけて、インドから経典を持ち帰っておられます。骨道を通ってインドに着くまでに六年、現地で経典を学び収集するのに六～七年、帰りは海路に三年かかったようでして、大変なご苦労をされています。三蔵法師の中でも一番有名なのは、玄奘三蔵でして、その旅行記「大唐西域記」をもとに「西遊記」が作られ、今日でも映画やテレビ等で孫悟空の話として上映されています。

因みに、三蔵とは、お釈迦さまの教えを書いた「経蔵」と、教えに依った生活規範や戒律を記した「律蔵」、それにお経を研究解説した「論蔵」という三つの宝（蔵）という意味でして、それを求めてインドに渡った訳経僧を三蔵法師といっているわけです。

そのように命を途中で砂漠の中に落とすという場合も多かったであろう、三蔵法師のご苦労によって、三蔵を中国へ持ち帰って、漢字に翻訳しました。この翻訳に当たって、中国の人は、意味をとって訳すというやり方と原語の発音を残すために、似通った発音の漢字に当てはめる音写（おんしゃ）という二通りの方法をとっています。

例えば、南無阿弥陀仏という言葉は、サンスクリット原語「namas（namo）〈ナモ〉、amitāyus amitābba〈アミダ〉、buddha〈ブツ〉」の音写です。音を写しただけですから、南が無い（南無）、どんな意味だろうと漢字を探ってみても全く意味はありません。意味は、「帰命」になります。南無阿弥陀仏とは、限りない「ひかり」と「いのち」〈阿弥陀〉の世界に目覚め、我々を救うためにはたらいておられる方〈仏〉に帰命〈南無〉、帰依するという意味になるのでしょうか。

経という漢字の意味

このようなことで、仏教全体を象徴的に表すスートラという原語は、経（タテ糸という意味）という漢字に翻訳されました。また、音だけとって、「修多羅（しゅたら）」と音写されています。

ご存知のように、漢字は、ものの形をかたどった象形文字が多いんです。経という漢字も、織機（おりき）に縦糸をまっすぐ張り通したさま【巠〈ケイ〉】を描いたところから象形されているそうです。また、経という字は、人間が、はたおり機の前に座って織物を作っている姿からきたのではないかと説明される先生もおられました。ですから、「糸」が人間で、「圣」は、はたおり機ということになるのでしょうか。

この縦糸を意味するところから、物事の根本精神とか、時代を貫くものというようなことを表す漢字として使われてきました。それをスートラの訳に当てたわけです。

また、これは以前聞いた話ですが、はたおりで一番神経を使うのは、縦糸を真っ直ぐ平行に引くことだそうです。うまく引けたら、横糸の方は適当にやっていれば、りっぱな織物ができる。織物を作るに当たっては、縦糸の引き方が大切だということです。

私たちの人生も同じようなことが思われます。お互い二度とない人生を人間として生まれてきましたが、それじゃ、自分の人生を通して、何を願い、どういう世界を築こうとしているのか、あなたの人生の縦糸はしっかり引けてますか。そう問われると何か心もとないものを感じます。煩悩に振り回され、美味しいものを食べたとか、どこかへ旅行に行ったとか、横糸ばかりに気をとられて、大切な人生の縦糸を見失いがちであります。

そういう私たちに、本当は人生の縦糸が大事なんですよ。そのことを教えてくれているのが、釈尊の教えであるから、早く仏法を聞くあ

なたになってください。

そういう訳経僧の、経という漢字に託した願いを感じますし、改めてすごい訳だなあと思います。

修多羅という音写

それから、スートラの発音を残すために、修多羅と音写したといいましたが、この修多羅という言葉は、経典にも度々出てきますし、正信偈にも「依修多羅顕真実」（修多羅によりて真実を顕す）と書かれています。

そのほかに、僧侶が葬儀などで着る七条袈裟の飾りに用いる組紐にも修多羅という名前が付けられています。簡略に言うと七条という衣は、布切れを縫い合わせ、大きな長方形の布地にしたものを体に巻いて、左肩のところで紐によって縛っています。後ろから見ると左肩から、その一本の大きな組紐が垂れていますが、それを修多羅といいます。体に巻いた布地が横糸に当たれば、修多羅紐は縦糸に当たります。肩で縛っている修多羅が散けると七条袈裟はバタッと下に落ちてしまいます。

皆さんは葬儀に亡き人を偲んで、葬場に来られますが、そこには七条を着た僧侶が読経をしていて、肩から垂れた修多羅が見えるはずです。亡き人を悲しんで来られたあなたも死なねばなりません。死を貫いていけるような、あなたの人生の縦糸はしっかりと引けていますか。縦糸（修多羅）がしっかりしていないと七条は散けてしまうんです。どうか縦糸を教えている仏法を聞くあなたになってください。そういう願いが衣ひとつにも込められているような気がいたします。

七条を小さくしたのが、五条です。これも横糸にあたる長方形の布地を体に巻いて、縦糸にあたる「威儀」と呼ばれる肩ひもで結ばれています。威儀が散けると五条は落ちてしまいます。これも七条と同じようなことを私たちに訴えているのでしょう。五条を簡略にしたものが、日常の法衣にかけている輪袈裟になります。

葬儀や法事などで、お経を上げたり、聞かれたりする時には、お経という漢字にも、衣にも意味と願いが込められていることを感じ取っていただければ幸いです。（文責　住職）